

大串弘美作 「和解の朝」

< 前編 >

高田陽子 行ってきまーす。わー、今日も寒そう。何だか雪でも降るみたい。ま、これが冬っ
てもんか。

陽子ナレーション わたし、高田陽子。カッコいい男の子とお金が大好きな、慈愛中学 2 年生。友達
はみんなわたしのことミーハーだって言うの。自分でもちょっぴりそうかなって思
う。カッコいい男の子を見ると、すぐ胸がときめいちゃって、ポーっとその人のこと
を考えてしまう。大抵は片思いに終わっちゃうんだけど。この辺で一度、熱烈な
本物の恋がしてみたいな、なーんちゃって。

(効果音) (都会の雑踏。車の音。)

ナレーション ふと向こうの交差点を見ると、3 歳くらいの女の子がトコトコと赤信号の横断歩
道を渡ろうとしている。

陽子モノローグ ちょ、ちょっと、母親は何やってんのよ。車が来たらどうする気？

陽子 あ、危ない！

(効果音) (キキーっと車のブレーキ音)

ナレーション その時だった。その女の子は道端から飛び出した黒い陰に抱き抱えられるよう
にして道路に倒れ込んだ。車は急ブレーキをかけて彼の直前で止まった。間一
髪だった。女の子を助けた人をよく見ると、何と高校生だった。黒い学生服が影
のように見えたのだ。

奥田弘樹 あのねえ、横断歩道渡るときはね、車が来ないかよーく見て、手を上げて渡るん
だよ。分かった？

陽子モノローグ キー、カッコいい！ 超カッコいい！ 早く里美に知らせなきゃ。

(効果音) (教室のガヤ)

陽子 おはよう、里美。

木村里美 あ、陽子、おはよう！

陽子 ちょっと聞いてよ！ さっき超カッコいい男の子見たんだから。

ナレーション と言ってわたしは、幼なじみで隣のクラスの木村里美に、その時の様子を一部
始終話して聞かせた。

里美 へえー、そんなにすてきだったんだあ。わたしも見たかったなあ。

陽子 でしょ？ それでさ、彼が一体どこの生徒なのか突き止めようと思って、後をつ
けていったの。で、どこに行ったと思う？ うちの学校のほうに歩いていくのよ！

里美 えー - ! もしかして青春高校？

陽子 そう、そうなのよ！

ナレーション うちの慈愛中学は女子高だが、青春高校は県内でもトップクラスの共学校で、場

所もすぐ近くだ。だから、青春高校の男子生徒はわたしたちのあこがれの的だった。

里美 えー、ほんと？ 彼って頭いいんだあ。やったじゃん。近くだから偶然を装って、待ち伏せでもして、友達になっちゃうとかっていうのはどう？

陽子 あ、それっていい考え！じゃあ今日の帰りに作戦実行ね。里美も付き合っ
よ。

里美 オーケー。じゃ放課後ね。パーイ。

ナレーション わたしたちはウキウキしながら別れた。そして放課後。

(効果音) (終業のチャイム)

里美 ごめん。待った？

陽子 遅いよ、里美。モタモタしてる間に彼が帰っちゃったらどうするのよ。

里美 全^{がぜん}く陽子はこのことになると俄然敏速なんだから。

ナレーション わたしたちは青春高校生が通る横断歩道の前で待つことにした。

陽子 それはそうと、里美、彼はわたしが見つけたんだから横取りしないで夜ね。

里美 そんなこと言ったって、彼のほうがわたしにホレちゃうかもしれないじゃない。

陽子 うぬぼれるんじゃないって。あ、来た来た！ 彼よ、あの一番背の高い人！

里美 どれどれ？ あ、あの人？ カッコイー！

陽子 よーし、行くわよ。

里美 ちょ、ちょっと！ 何するのよ、陽子。あ、危ない！

ナレーション 里美が叫んだ時だった。わたしの思惑どおり、彼がわたしの腕をグイッと引っ張った。

奥田弘樹 君、危ないじゃないか！

田中真 赤信号を渡っちゃいけないのは、小学生でも知ってるぜ。

陽子 あ、すみません。ちょっと頭が疲れてて、ポーっとしてたんです。助けてくれてどうもありがとう。わたし、慈愛中学2年の高田陽子です。こっちは友達の…。

里美 木村里美です。よろしく！

弘樹 僕は青春高校1年の奥田弘樹。こっちは親友の田中真。

里美 お隣の高校だったんですね。これからもよろしくお願いします。お礼にマックでコーラでもごちそうしたいんですけど、一緒にいかがですか？

弘樹 悪いけど、僕たちこれから行くところがあるから。

真 じゃ、気をつけてね。

里美 あーあ、行っちゃった。でも、まずは第1関門突破ってとこね。

陽子 里美もよくやるわよね。

里美 それはお互い様でしょ。明日も会えるといいね。

陽子 うん。じゃあ、また明日ね。パーイ。

里美 じゃあね。

(効果音) (ドアの開く音)

陽子 ただいま。

祖父 お帰り。遅かったね。

ナレーション そう言って出てきたのは、おじいちゃん。昔、そのころは新潟の田舎にいたおじいちゃん夫婦のところに預けられてたことがあって、それ以来わたしは、おじいちゃんおばあちゃん子だ。

陽子 あーおなかすいた。なんだ、ご飯まだなの？

祖父 ごめんよ。おばあちゃんが夕方買い物に行ったらね、高値会で一緒の重田さんに会っちゃってねえ。ついつい話し込んでしまったらしいんだよ。サツマイモふかしてあるから、それでも食べてまっておくれ。

陽子 えー、またサツマイモ？ 芋ばかり食べてると、芋臭くなっちゃうじゃん。

ナレーション 祖父は若いころからクリスチャンで、毎週日曜日には熱心に教会に通い、その高値会という老人会に入っていた。2人とも大好きだけど、クリスチャンのおじいちゃんとおばあちゃんは正直言って好きではない。どうしてかって言うと... あ、弟の健一が遊びから帰ってきた。

健一 ただいま！ わー、サツマイモだ。

祖父 健一はお芋が大好きなものな。

健一 うん。僕、お芋が大好きだよ。お姉ちゃんも食べてごらんよ。おいしいから。

ナレーション そう言って健一はサツマイモを1つ差し出した。まだ小学校4年生だ。

父 ただいま。

健一 あ、お父さんだ！

ナレーション 父と聞いただけで、わたしの顔がこわばれるのが自分でも分かった。

健一 お姉ちゃん、ほら見て！ ケーキだよ。

祖父 おう、よかったなあ。お父さんのお土産かい？

父 ケーキ屋の前を通りかかったら、おいしそうで、何だかお前たちに買って帰りたくなってね。陽子の大好きなモンブランもあるぞ。

陽子 わたし、要らない！

ナレーション わたしは、健一からもらったサツマイモを手に、駆け足で2階へ上がっていった。自分の部屋に入ると、そこは真っ暗だった。わたしは、電気もつけずにベッドの中に潜り込んだ。

陽子モノローグ 何よ、いい父親面しちゃって。今更遅いよ。クリスチャンになったからって、そう簡単に人間が変わるわけないじゃない。そうだよ、あんな優しいのだから上辺だけ。あいつのせいで、お母さんは体壊して死んじゃったんだ。お母さんを殺した罪はそう簡単に消えるわけないんだから。どんなにいいことしたって、お母さん、帰ってきやしないんだから。あんな人、絶対^{ゆる}赦さない！ お母さん、お母さんだってそう思うでしょ？ お母さん...

ナレーション そう思うと、涙があふれてきた。わたしはまくらをぬらしながら、いつの間にか眠ってしまっていた。

次の日の朝。空は青く澄み渡っていたが、昨日より一段と寒い。わたしは、昨日の交差点で、久々の青空を見上げながら、信号が青になるのを待っていた。

弘樹 おはよう。もう頭痛は直った？

陽子 あ、奥田先輩！ おはようございます。昨日はありがとうございました。

真 信号が青になるのを待ってるなんて、昨日より成長したじゃん。

ナレーション わたしは、田口先輩の言葉を無視して、奥田先輩に話し掛けた。

陽子 先輩はいつもこの時間なんですね。

弘樹 え？ 何で知ってるの？

陽子 昨日見たんですよ。先輩が小さい女の子を助けたのを。

弘樹 えー？ 見てたの？

陽子 すごくカッコよかったです！

弘樹 カッコいいとか、そんなんじゃないよ。気がついたら女の子抱えて道路に転がってた。自分でも驚いたよ。

陽子 そんなこと言って。わたし、先輩の大ファンになっちゃったんですからね。

真 奥田はな、君みたいなミーハーな女の子と違ってすごいやつなんだから。

陽子 ひっどーい。ミーハーだなんて。わたし、そんなんじゃないですよ。

真 こいつは、やることすべてが周りとは違うんだよな。おれたちじゃ恥ずかしくてできないブリッ子ふうなことを、平気な顔してやるんだぜ。電車でお年寄りを見ると、遠くいてもさっと席を譲る。おれの投げ捨てたジュースの缶を黙って拾ってクズかごに捨てる。万引きの後輩はさりげなく注意して戻させる。「聖人君子」って言葉は、こいつのためにあるんだな。

陽子 奥田先輩って、本当にすてきな人なんですねえ。

弘樹 そんなことないよ。僕はただ、神様が^{けが}つくられた自然を汚したり、悪いことをするのが許せないだけだよ。

陽子 え、神様？

ナレーション わたしは自分の耳を疑った。

真 そう、何を隠そう、こいつは「アーメン神様、イエス様」、熱心なクリスチャンなんだ。

陽子モノローグ えー、先輩もクリスチャン？

ナレーション 何だか、きれいなガラスのお城が目の前で音を立てて崩れたようだった。奥田先輩の顔の後ろに、父の顔がふっと見え隠れした。

陽子モノローグ 嫌い、嫌い、みんな嫌いよ！

真 お、おい、高田、一体どうしたんだよ！

ナレーション わたしは、呼びかける田口先輩の声を振り切るかのように、小走りに駆け出し

ていた。

<後編>

真 奥田は熱心なクリスチャンなんだ。

陽子モノローグ えー、こんなにカッコよくてすてきな先輩が、あの大好きなお父さんと同じクリスチャン？

ナレーション やみに輝く星が、突然消えてしまったようだった。

里美 おっはよー。陽子、何シケた顔してんのよ。

ナレーション わたしは親友の木村里美に事の次第を話して聞かせた。

里美 そうだったんだあ。そうだ、気晴らしにさあ、パーっとカラオケにでも行こうか。

陽子 あ、それいい。希望の星は消えちゃったし、もうムカムカするから、パーっと遊んじゃえ。じゃ放課後ね。

ナレーション 辺りはもう暗くなっていた。里美と別れて空を見上げると、冬空に星が小さく光っている。思い出したように、ふっとやりきれない寂しさが身を包んだ。

陽子モノローグ (ため息)クリスチャンか..。

ナレーション 涙がにじんできた。何か無性に先輩に会いたくなかった。星を見上げながら歩いていると、ふいにだれかにぶつかった。

陽子 あ、すみません。

弘樹 君、高田君じゃないか。どうしたんだい、こんな時間に？ 朝も急に黙って行っちゃったし。何かあったの？

ナレーション 先輩の言葉を聞いたら、なぜか途端に涙があふれてきた。

陽子 何でもないんです。ただ...。

ナレーション 涙が止まらなかった。そんなわたしを先輩はただ黙って見守っていてくれた。

弘樹 何か訳ありだな。とにかく座ろうか。

ナレーション わたしたちは近くのベンチに腰を下ろした。先輩に聞かれるままに、わたしはクリスチャン嫌いの訳を話し出した。

陽子 今から4年ぐらい前、父が事業に失敗して、それまではお酒なんかほとんど飲まなかったのに、それからというもの、毎晩飲むようになったんです。おまけに父は仕事もせず、昼間からお酒を飲んで母に暴力を振るうようになって。母は仕方なく父の代わりに働きに出るようになり、毎日7時過ぎまで仕事をして、帰ってから食事を作ったり、わたしたちの面倒を見たりしてくれたんだけど...。お母さん、もともと体が弱かったのに無理をして、とうとう過労で倒れちゃって、そのままわたしたちを残して死んでしまったんです。

弘樹 そうか...。そんなことがあったんだ。

陽子 わたしは父を恨みました。だって、あの人が母を殺したようなもんじゃない！ それから父は、クリスチャンの祖父母に勧められるまま、教会に行くようになった

た。半年ほどして父はクリスチャンになり、お酒も一切やめてまじめに働くようになったの。今は、優しい父親してる。でもそんなの信じられない。またそのうちお酒を飲むようになって、前みたいになるかもしれない。人間がそんなに簡単に変わるわけじゃない。クリスチャンなんて、しょせん上辺だけの善人じゃないの？

弘樹 ...上辺だけの、善人か。うーん、キツいなあ。確かに人間って、そんなに簡単に変わるってできないだろうな。表面は紳士淑女のようでも、裏で汚いことやってる人もいっぱいいるもんね。いや、人ごとじゃないんだ。僕も実はそんな“上辺は善人”の一人だった。

陽子 え、先輩が？

弘樹 ああ。小学5年の時の担任が美術の先生でさ、一生懸命絵を教えてくれて、自分でもこんな才能があったかと思うくらい上達して、県の絵画コンクールで入賞して、授賞式に、県庁のあるその大きな町に汽車で行くことになったんだ。おややお回りも喜んでくれた。ところが、翌年のコンクールでは、クラスにはもう一人うまいのがいて、その子が賞を取った。ところが僕は、親を喜ばせたい一心で、「今度も賞を取った」とウソを言って、授賞式に出るふりをして、その町に行ったんだ。でもそれが、僕の生き方、と言っちゃ大げさだけど、中学に入ってから生活を壊してしまった。一度作った「頭のいい息子」、「よくてできる奥田」というイメージを崩さないために、ウソを言ったり、カンニングをしたり、ほんとに汚いことまでやって、偽りの自分をさも本物のように親やみんなに見せ続けた。でも心の中はたまらなく惨めで、むなしくて。それだけじゃなくて、もう苦しくてどうしようもなくなって、小さいころ行ってた教会に行ってみたんだ。

陽子 今の先輩見ると、そんなこと、信じられない。その教会で、何があったんですか？

弘樹 うん、君と同じ中2の時だったよ。中学生クラスというのがあってね。そこの先生が、太田先生っていうんだけど、僕の話をも1時間近くじっと聞いてくれて、聖書から教えてくれたんだ。そんな、自分を正当化しようとして、偽ったり、相手を裁いたり、時には陥れたりする自分中心の思いを「罪」というんだって。

陽子 「罪」？ でも罪って...

弘樹 ああ、普通は人のものを盗んだ、人を殺したっていう、表に形で表れたものだよ。でも、その罪を赦すために、神の一人子のイエス様が、十字架にかかって身代わりに死んでくださった。それが、神様の、こんな醜い僕への愛だったんだ。

陽子 ...何だか、あまり突飛な話で、よく分からない。

弘樹 初めてだろ、こんな話？ ビックリしちゃうよね。でも、ほんとに神様の愛って、信じられないほどすごいと思うんだ。ちょうど夏休みで、CSK という教会に行っ

る中学生たちのキャンプがあつてさ。3日目の夜のキャンプファイアの中でのメッセージだった。自分を自分で変えようともがくのはよそう。自分を必死で取り繕うのもやめよう。そのまま、ズタズタの心のままでいい。イエス様の十字架の愛の中に飛び込みなさい」って言われた時は、もう涙ボロボロで、前のほうに出てった。

陽子 そのままで…。愛の中に…。

弘樹 そう。だから陽子ちゃん、って呼んでいいかな。僕はクリスチャンだけど、聖人君子なんかじゃない。でもイエス様信じて、裏表のない、ありのままの自分になれるようになった。「自分は絶対正しい」って思う罪を砕いてくださる神様だけが、本当に人間を変えてくださるんじゃないかな。君は、お父さんがお母さんを散々苦労させて、死にまで追いやって、自分だけクリスチャンになって善人ぶっているのが赦せないんだろ？ でもそれは違うと思うな。お母さんを亡くされて一番苦しめたのは、お父さんじゃないかな。今のお父さんの、君や、健一君といったっけ、弟さんへの優しさは、お母さんにしてあげられなかった、愛の償いのような気がするんだけど。

ナレーション その時だった。

健一 お姉ちゃん！ お姉ちゃん！ 大変だよ。お父さんが、お父さんが電車の中で、酔っ払いに刺されて…。

陽子 え、お父さんが？！

ナレーション わたしは、奥田先輩が拾ってくれたタクシーで、父の運ばれた病院に急いだ。何でも、会社から帰る電車の中で、中学生らしい女の子にしつこく絡む酔っ払いを、見かねて注意した父に、相手はいきなりナイフを取り出して刺したとかで、かなりの出血だという。先輩は電車の中で、一生懸命声を出して祈ってくれた。

陽子モノローグ 神様、父を、父を助けて！

ナレーション わたしも思わず心の中で、そう祈っていた。

病院では祖父母が待っていた。奥田先輩は、血液が足りないと聞くとすぐに申し出て採血室に入っていった。

祖父 陽子、大丈夫だよ。お父さんには神様がついていなさるんだから。神様はね、最善以下のことは決してなさらないんだから。

ナレーション 祖父の言葉に、自分でも不思議なくらい素直に、わたしはうなずいていた。手術室の扉は、「手術中」の赤いランプとともに、閉じたままだった。その1時間が、わたしには永遠のように思われた。やがてランプの灯が消えた。

陽子 先生。父は、父は…？

医師 ああ、お嬢さんですか。大丈夫ですよ。危ないところだったが、あの高校生の方の輸血が効きました。

陽子 よかったあ、おじいちゃん！

健一 お姉ちゃん！

祖父 よかったなあ、よかった。

陽子 先輩、奥田さん。あ、ありがとうございました！

奥田 いや、感謝なら、イエス様にだな。

ナレーション 翌朝5時ごろ、父は麻酔から覚めた。

父 陽子か。寝ないで^み着ててくれたのか。ありがとう。いや、陽子みたいな女の子がいじめられてるのを見た^ら、年がいもなく腹が立ってなあ。こんな事になってしまった。心配かけてごめんよ。

陽子 お父さん…。

父 陽子、いい機会だ。ぜひ言っておきたいことがある。陽子はお父さんのこと、恨んでるだろう。お母さんを死なせた^{って}。本当にそのとおりだ。お父さんは取り返しのつかないことをしてしまった。お前の大事なお母さんを…。陽子、お父さんを、どうか赦してくれ。

陽子 いいの、もういいのよ、お父さん。

ナレーション そう言うと、わたしはそっと病室のカーテンを開けた。白み始めた東の空から、サーッと輝き出た朝日が、目にまぶしかった。

< 完 >